

未来主義の先駆者、ガブリエル・アロマルと  
 アルバロ・アルマンド・バセウル  
 — ビセンテ・ウイドブロの初期論集『徒然に……』を巡って

鼓 宗

Forerunners of Futurism, Gabriel Alomar  
 and Álvaro Armando Vasseur,  
 — as vindicated by Vicente Huidobro's early collection  
 of criticism, *Pasando y pasando...*

TSUZUMI Shu

In *Pasando y pasando...* ("Passing and Passing...") (1914), the first collection of criticism published by the avant-garde Chilean poet Vicente Huidobro, the author discusses the "Futurist Manifesto" published by Filippo Tommaso Marinetti in the French newspaper *Le Figaro* in 1909. Like the earlier critique of Marinetti's manifesto written by the respected Nicaraguan poet Rubén Darío, Huidobro was scathing in his criticism, and also mentioned the Catalanian poet and writer Gabriel Alomar and the Uruguayan poet Álvaro Armando Vasseur as having preceded Marinetti as forerunners of Futurism. Huidobro argued that Alomar anticipated the Italian Futurists in his use of the name, and that Vasseur, while using the term *auguralismo*, anticipated the content. This paper reaffirms the place in literary history of these two almost forgotten "forerunners of Futurism" and investigates how their existence affected Huidobro's attitude toward the Futurists.

キーワード: ビセンテ・ウイドブロ (Huidobro, Vicente)、ガブリエル・アロマル (Alomar, Gabriel)、アルバロ・アルマンド・バセウル (Vasseur, Álvaro Almando)、未来派〔未来主義〕(futurisme/futurismo)、クレアシオニスム (créationnisme/creacionismo)

## 1 最初に——初期論集『徒然に……』

ビセンテ・ウイドブロはその生涯に『向かい風』*Vientos contrarios* (1926) をはじめとして、いく冊かの評論集を発表している。そのなかで1914年に出版された『徒然に……』*Pasando y pasando ...* は最初のものであり、この詩人のごく若い時期の思想形成の跡をたどるための重要な手がかりとなるものだ。ウイドブロは同書を著した動機を「若干二十歳にて四冊ほどの著書を持ちたいという気まぐれ」<sup>1)</sup> であると自ら語っている。直前の二年間には、三冊の初期の詩集、『魂のこだま』*Ecoas del alma* (1912)、『夜の歌』*Canciones en la noche* (1913)、『沈黙の洞窟』*La gruta del silencio* (1913) を世に送っており、また「若いミューズ」*Musa joven* (1912) と「青」*Azul* (1913) という二つの詩誌を友人とともに創刊していた。こうした経歴は、ウイドブロがすでに一人前の詩人としての自負を抱いていたであろうことを容易に想像させるが、その通り『徒然に……』に収められた各論考は、ヨーロッパやスペイン語圏のアメリカで活躍する作家たちやその作品を批評するに際して筆の迷いをいささかも見せない。こうした迷いのなさは生涯を通じて一貫しており、さらにそれを支えている美学的判断の基準もぶれることがない。

目次には、自己の文学形成について触れた自伝、これから手がけようという作品の構想、短編小説等、複数のジャンルの文章が並ぶ。そのうちの作家、詩人、戯曲家たちを論じた章に目を向ければ、スウェーデンのアウグスト・ストリンダベルイ (1849-1912)、イタリアのガブリエーレ・ダンヌンツィオ (1863-1938)、スペインのメネンデス・イ・ペラーヨ (1856-1912) やハシント・ベナベンテ (1866-1954)、あるいはメキシコのアマード・ネルボ (1870-1919) らが組上に載る。そして、そこに混ざって「未来派」*El futurisme* の章がある。

この論稿に見る、前衛主義の嚆矢とも言うべき未来派に向けられたウイドブロの視線は、その領袖フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティの唱える主張に批判的である。その論のなかで特筆されるべき点は、「未来主義」を、あるいはそれに類する理念を掲げた先駆者としてガブリエル・アロマルとアルバロ・アルマンド・バセウルという二人の作家・詩人の名前が挙げられていることである。この二人のうちバセウルがウルグアイ人であることから、ウイドブロは「〈未来主義〉はアメリカ大陸のものである」<sup>2)</sup> とさえ述べている。本稿では、アロマルとバセウル、両者の文学史的な位置付けを確かめた上で、ウイドブロが未来派と向き合う際に彼らの存在がどのような意味を持ったのかを考察する。

1) “el capricho de tener unos cuatro libros a los veinte años”. (Huidobro, Vicente, *Pasando y pasando ...* (1914) Santiago de Chile, Imprenta y Encuadernación Chile. p.28)

2) “Por lo tanto el Futurismo es americano” *ibid.* p.163.

## 2 ガブリエル・アロマルとその未来主義

『徒然に……』の「未来主義」の章でウイドブロが、マリネッティ以前に futurismo という用語を用いたとしているのが、ガブリエル・アロマルである<sup>3)</sup>。

アロマルは1873年、マヨリョルカ島のパルマ・デ・マリョルカ——マリョルカ、メノルカ、イビサ、フォルメンテラの4島からなるバレアレス自治州の州都——に生まれた。故郷パルマで、次いでバルセロナで教育を受けた。作家・詩人という文学者の顔を持つと同時に、当時珍しいことではないが、左派の思想に共鳴してカタルーニャ主義を掲げる政治家として活躍した。共和政府のもとではローマとカイロの大使を務めている。スペイン内戦での共和派の敗北により帰国が望めなくなり、そのままエジプトに亡命。同地で客死した。

カタルーニャ語とカスティリヤ語の両言語を駆使したアロマルの著作の中心は、『社会主義的カタルーニャ主義』*Catalanismo socialista* (1910) のような政治的作物であった。バルセロナの「カタルーニャの人民」*El Poble Català* 紙やマドリードの「不偏不党」*El Imparcial* 紙の寄稿者として活躍した。後者では、レコンキスタ時代のキリスト教国のイスラム教徒への最初の勝利とされるコバドンガの戦いに従来与えられてきた評価に疑義を唱え、自らのカタルーニャ主義が反スペイン的な態度と結び付いていることを鮮明にしている。

詩人としてのアロマルはモデルニスモの詩人たちと親密な関係を結んだ。なかでも運動を指導したニカラグアの詩人ルベン・ダリーオとは懇意にした。またアウジェニ・ドルス（エウヘニオ・ドールス）やアンドレス・ゴンサレス・ブランコといった若い作家たちにも広く門戸を開いたものだが、同派の傾向の強い「レナシミアント（ルネサンス）」*Renacimiento* 誌に寄稿した。アロマルの作風は、『火の柱』*Columna de Foc* (1911) に見られるようにカルドゥッチやダンヌンツィオの影響がうかがわれる、モデルニスモや高踏派、あるいは古典への回帰を目指したノウサンティズマ（1900年主義）に分類されるものであった。そこに、ウイドブロがその後の作品の範を求めるような前衛主義的要素を見出すのは困難である。

文学者としては古い潮流の追従者として文学史のなかで埋没してしまっても不思議ではないアロマルが、カタルーニャ・ナショナリズム研究の外で今日なおその名前を引き合いに出されるのは、ウイドブロが『徒然に……』でその名前を挙げたのと同じ理由、すなわち1904年にバルセロナ文芸協会で「未来主義」*El futurisme* と題された講演をおこなったことによる。

3) *ibid.* p.163. 呼称の問題に限ってならば、マリネッティについての研究でも、先唱者としてこのマリョルカ人について言及されることがある。

アロマルのこの講演は翌1905年にその全体がアヴァンス Avancé 社から出版された<sup>4)</sup>。そして1907年にそのスペイン語訳が「レナシエント」誌に2号にわたって分載され、さらにその要約が、1908年、「メルキュール・ド・フランス」Mercure de France 誌に掲載された。ことにこのフランスの新聞における紹介は、広く反響を呼び、マリネッティその人もその記事を目にしたとおぼしい。アロマルによって提唱された「未来主義」は、既存の価値を否定し、破壊しようとする前衛主義の主張ではなく、人間が未来に有する可能性を強く訴える。この人間は芸術と科学とを統合し、現代と未来とを生きる。様々な国家的な理想を理解する一種の超人である。

しかし、その後、アロマルの主張は忘却されてしまっていたと言ってよい。1922年にはすでに、サンティアゴ・バレンティ・カンブが『イデオログ、理論家、預言者』のなかのこのマリョルカ人に当てた章<sup>5)</sup>で、カタルーニャの知的環境はアロマルの議論に対して冷淡に振る舞ったと述べている。同じことはスペイン全体にも言えた。スペインにおける前衛主義の最大の理解者ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナが主宰する「プロメテオ」Prometeo 誌がマリネッティの宣言をいち早く紹介——ゴメス・デ・ラ・セルナ自身、アルキペンコやジャズバンドまでを一つの「主義」として取り上げた『イズム』Ismos で未来派に一章を当てている——した折、寄稿者の少なからずがそれに先ずるものとしてアロマルの未来主義の存在を指摘したにもかかわらず、その反響は乏しかった。実際、アロマルの思想はおろか、マリネッティの運動に追随する運動もスペインには根付かなかった。

けれどもそうした事情があるとは言え、アロマルの未来主義が人々の記憶から薄れていったいっそう大きな要因は、複数の者たちが指摘している通り、フランコ時代における地方主義への弾圧であろう。公共の場でのカスティーリャ語以外の言語使用すら禁じられたなかで、カタルーニャ主義者であったアロマルの著作が受けたであろう扱いは想像に難くない。マリネッティの未来派が最初の前衛主義として、それを支持しようとしまいと、二十世紀前半の革新的な芸術を語る時に避けて通れない存在として記憶されているのに対し、アロマルのそれは忘却の彼方に葬られた<sup>6)</sup>。ただし、スペインの前衛主義ウルトライスマにおいて指導的役割を果たした

4) Alomar, Gabriel, *El futurisme: Conferencia llegida en l'«Ateneo Barcelones» la nit del 18 de Juny de 1904.* (1905) Barcelona, L' Avancé.

5) 'Gabriel Alomar' en Santiago Valentí Camp (1875-1934), *Ideólogos, teorizantes y videntes.* (1922) Barcelona, Minerva, pp. 287-296

6) 後出の Gené, Emilio (1976), p.294には、1955年にアロマルという作家が誰であるのか手を尽くして求めても、ウイドプロの書いたページ以外にその存在を確認できないという慨嘆が、アンソロジー『ビセンテ・ウイドプロ——詩と散文』Vicente Huidobro: *Poesía y prosa.* (1957) Madrid, Aguilar に載る Antonio de Undurraga による序文「クレアシオニスムの理論」'Teoría del creacionismo' から引用されている。

ギリェルモ・デ・トレはアロマルの存在を見落とさず、1960年代に出たスペインとヨーロッパの前衛主義の歴史を扱った著作の書誌に、1905年のバルセロナ文芸協会での講演録を含めている<sup>7)</sup>。

1975年のフランコ体制の終焉を迎える前、すでに1970年頃までに民主主義諸国との関係を改善するためにそれまで厳格に実施されていた言論統制が緩められると、アロマルの著作もようやく復権の兆しを見せ始めた。1970年にバルセロナで『未来主義、その他のエッセイ』*El futurisme i altres assaigs*が、1972年にはマヨルカで『死刑』*Pena de mort*が出る等、カタルーニャ語で書かれた作品に光が当たった。さらに1970年代の後半になると、アロマル再評価の傾向はさらに顕著になる。1979年のアンヘル・ゴンサレス・ガルシアらの『前衛主義芸術の記録——1900年—1945年』<sup>8)</sup>はキュビズムやダダ、あるいはシュルレアリスムに留まらず、後期印象派からバウハウスまで幅広く前衛主義を捉えて取り上げた500ページを超える大部の資料だが、巻末の参照にアロマルの講演録が挙がっている。

1990年代に入ると、ハイメ・ブリウエガが『スペインの前衛主義の三十年』に「スペインにおける未来主義——前衛と政治」<sup>9)</sup>を載せた。1995年出版のファン・マヌエル・ボネ『スペイン前衛主義事典』<sup>10)</sup>は、前衛主義の諸流派、それに関わった作家・詩人・美術作家、彼らの作品、さらには運動の機関紙を項目の見出しに据えた、資料として貴重な本格的な事典であるが、ここではカタルーニャの作家のために半ページほどが割かれている。この時期、他にもいくつかの前衛主義を扱った研究が公になっており<sup>11)</sup>、もはやアロマルとその未来主義が忘れられる懸念はなくなった。そして、さらにこの復権を確かなものとしたのは、2000年から2004年にかけて、原著がそうである通りにカタルーニャ語で出た『全集』<sup>12)</sup>の刊行であろう。さらには現在、プリ

7) 『前衛文学の歴史』Torre, Guillermo de, *Historia de las literaturas de vanguardia*. (1965) Madrid, Guadarrama. しかし、主著の一つ『ヨーロッパの前衛文学』Torre, Guillermo de, *Literaturas europeas de Vanguardia*. (1925) Madrid, Caro Raggio. も未来派を取り上げているが、アロマルの名前は、ホイットマンについて論じた章の注に見られるだけである。

8) González García, Á., Calvo Serraller, F., Marchán Fiz, S. *Escritos de arte de vanguardia 1900/1945* (1979) Turner. (2009) Madrid, Istmo.

9) Brihuega, Jaime, "El futurismo en España. Vanguardia y política" en Morelli, Gabriele [ed.] *Treinta años de vanguardia española*. (1991) Sevilla, El carro de la nirve.

10) Bonet, Juan Manuel. *Diccionario de las vanguardias en España 1907-1936* (1995) Madrid, Alianza.

11) 例えば、Joan Abelló Juanpere, 'Presencia e influencia del futurismo en Cataluña' en Resina, Joan Ramon [ed.]. *El aeroplano y la estrella: El Movimiento De Vanguardia En Los Países Catalanes (1904-1936)* (1997) Amsterdam, Rodopi.

12) *Obres completes de Gabriel Alomar II. El futurisme. Articles d' «El Poble Català» (1904-1906)*. (2000) Moll, Palma de Mallorca, *Obres Completes de Gabriel Alomar vol. III. Sportula. Articles d' El Poble Català*



は本当に、新しいのだろうか。とんでもない」<sup>19)</sup>と。

### 3 アルバロ・アルマンド・バセウルと前兆主義

ここで『徒然に……』に戻ると、ウイドプロは上の引用の通り、わずか5年ばかり前に誕生したばかりの未来派の革新性を否定している。周知のように「未来派宣言」は1909年2月20日付のフィガロ紙に、当時はフランス語で詩作をしていたイタリアの詩人マリネッティによって発表された。ウイドプロは件の論稿に、11箇条の宣言のスペイン語訳を収めている。

その概略を記せば、マリネッティは危険への愛を訴え、勇気、大胆さ、反抗<sup>20)</sup>を本質的なものとし、平手打ちに象徴されるような攻撃の運動を称揚する。戦闘や戦争——世界の衛生を保つ唯一の手段——を称賛する。女性を蔑み、道徳を臆病なものだとと誹り、図書館や美術館を破壊せよと叫ぶ。自動車をサモトラケのビクトリア<sup>21)</sup>よりも美しいと賛美し、詩人は機械と巨大建築の美——機関車、定期客船、飛行機、工場、鉄道駅、橋梁——こそを歌わねばならない訴える。

それに対してウイドプロは、イタリアの詩人が高らかに謳ったこれらの宣言は『オデュッセイア』や『イリアス』から一切の進歩がないと切り捨て、その中身はピンダロスが『頌歌』ですでに歌ったものだと断じる。そして女性に対する宣戦布告には、未来派の精神的退廃の匂いを嗅ぎ取っている。ウイドプロがマリネッティの宣言のうちに認める美点は唯一、自由詩を重視する態度だけであるが、それさえもポーランドの象徴派の詩人マリー・クリンシスカを始め、ギュスターヴ・カーンやヴィエレ＝グリファンといった先人たちがかつて行ったことであるとの理由から、それが独自の発想ではないと指摘している。

そして、「未来派宣言」の独創と革新を退けるいっそう重要な根拠とされたのは、上で見たようにアロマルの「未来主義」の存在だが、加えてそれを補強する証拠としてもう一つ挙げられたのが、ウルグアイの詩人、アルバロ・アルマンド・バセウルがアロマルよりもさらに早い時期に唱えていた前兆主義<sup>アウグラリスモ</sup>であった。名前こそ「未来」とは名乗っていないが、そこに宣言されているのは、未来主義の主張そのものであるとウイドプロは指摘する。

19) “Y he aquí que un buen día se le ocurrió al señor Marinetti proclamar una escuela nueva: el futurismo. ¿Nueva? No.” Huidobro, V. (1914) p.163.

20) ただし、本来、「反抗」rebeliónとあるべきところ、誤植であろうか、ウイドプロは「宗教」religiónとしている。

21) この引用に当たって、ウイドプロは勝利の女神をギリシャ神話のニケの名ではなく、ローマ神話のそれで呼んでいる。

前兆主義の提唱者、バセウルは1878年、ウルグアイの首都、モンテビデオに生まれ、1969年に同地で没した。いずれも同郷だが、自宅の「展望塔」にこもり詩作を続けたフリオ・エレーラ・イ・ライシヒ Julio Herrera y Reissig (1875-1910) や、文学観を巡る激しい論戦の相手となったロベルト・デ・ラス・カレラス Roberto de Las Carreras (1873-1963) らとともに、二十世紀初頭にロマン主義からモデルニスモへと移り変わろうとしていたウルグアイの新しい時代の文学を担った。作品には、ウイドブロが彼に未来主義の先駆者という栄誉を与えることになった「前兆主義」を掲げるいくつかの詩集、『前兆の詩』*Cantos Augurales* (1900) や『もう一人の自我の詩』*Cantos del otro yo* (1908) 等がある。

バセウルのスペイン語圏の文学史における位置付けは、ウルグアイ文学史におけるそれと必ずしも合致しない。前者にあつては、ウイドブロが『徒然に…』でその名前を挙げていなければ、おそらくそれを思い出す者はアロマルの場合よりもさらに少なかったであろう。しかしその存在は、ウルグアイ文学にとってはもう少し大きな意味を持つ。1955年に出た『全詩集』に寄せられたエミリオ・フルゴニの署名がある序文<sup>22)</sup>は詩人の功績を振り返って、バセウルがモンテビデオのカフェ、ポロ・バンバ Polo Bamba で開いていたテルトゥリア——文人たちのサロン——が果たした役割が、ゴメス・デ・ラ・セルナがマドリードのカフェ・ポンボで主宰したテルトゥリアのそれと等しいものであったと述べている。しかしその一方で、ウイドブロが重視した前兆主義には言及していない。つまり、ウルグアイ文学史において、バセウルが前衛主義の先駆者として評価されていたわけではないことが示されている。

バセウルは詩作の他に翻訳も手がけており、ウォルト・ホイットマンの『草の葉』*Leaves of Grass* (1855) の最初のスペイン語への紹介者であった。1912年にこのアメリカの詩人の詩編を編んだ『詩集』<sup>23)</sup>を出したのだが、そのなかにホイットマンが1855年の初版以来生涯をかけて書き継いだこの詩集を含めている。バセウルの前兆主義には、『自然論』(1836)をはじめとするラルフ・ウォルドー・エマソンのエッセイのこだまが聞かれる。これは、バセウルがホイットマンの読書——当初、英語の原文ではなくイタリア語訳によって知ったのだという指摘もあるが<sup>24)</sup>——を通じて得た性向であるか、もしくはエマソンの超絶主義への関心が彼にホイットマンの詩編を好むように仕向けたのか、いずれにしてもバセウルのエマソンへの傾倒と『草の葉』の詩人の翻訳とは無関係ではないだろう。

22) Frugoni, Emilio, 'Estampa de un poeta y su poesía' en Vasseur, Álvaro Armando, *Todos los cantos*. (1955) Montevideo, Ministerio de Instrucción Pública y Previsión Social. p.XI.

23) Whitman, Walt, Vasseur, Álvaro Armando (tr.), *Poemas*. (1912) Valencia, F. Sempere y compañía.

24) Allen, Gay Wilson, Folsom, Ed, *Walt Whitman and the World*. (1995) University of Iowa Press.



バセウルは『新しい世界の詩』(1907)の「アトランティスへ」<sup>25)</sup>で、伝説の古代の島に寄せて新しい世界へ導く力を歌っている。そこでバセウルは自由な都市を称揚する。それは「驚嘆すべき未来の前兆に満ちた輝かしい詩」<sup>26)</sup>である。そこで歌われるのは、まだ神が死んでいない世界であるが、たとえば、「ある悲劇作家への頌歌」では、村や町、都市、さらには国際的な都市からなる「大いなる産業の道」が称揚される<sup>27)</sup>。バセウルは都市を一種の未来のユートピアとして提示するが、ただし、それは科学が人間の意識を改革する時代にあって、その象徴とされた機械化された都市の姿ではない。バセウルの都市は、古代ギリシャやローマの時代においてそうであったろうと夢想される、理想化された、そこに自由な人間が存在する未来の都市であった。

それを謳う手法もイタリアの未来派が試みたように実験的なものではなく、先に触れたようにモデルニスモの響きを感じさせるロマン主義的なものであった。バセウルは同世代のスペイン語圏の詩人たちの例に漏れず、若い頃にモデルニスモの洗礼を受けている。二十歳の時にブエノスアイレスに赴いて、同地でアルマフエルテの異名で活躍したペドロ・ボニファシオ・パラシオス(1854-1917)や、当時、ジャーナリストとしても活躍していたレオポルド・ルゴネス(1874-1938)、さらにはダリーオといった詩人・作家たちと交わった。

他の二人よりもより年嵩(ダリーオは1867年の生まれ)のパラシオスの詩はモデルニスモというよりはロマン主義の範疇に留まるものであったかもしれない。しかし、権力者を憎悪し貧者に愛情を向けるこの孤高の詩人がものした、物質的法則が束縛する人間の性質とその権利を預言する作品にこそ、バセウルの前兆主義は多くのものを負っているように思われる。モデルニスモ全盛の時代に抗うように、バセウルの詩が湛えていたロマン主義の調子は、この年長の詩人との交流から得られた性質であろう。ルゴネスは、ユゴーの影響を受けながらやはりロマン主義から出発したが、地方的なものをラフォルグに学んだ象徴主義の技巧を織り込んで歌った『感傷的な暦』(1909)によって、アルゼンチンのモデルニスモを代表する存在となった。そのルゴネスを『黄金の山々』で見出したのは、ダリーオであったが、故郷ニカラグアを離れて大西洋の両岸でモデルニスモを牽引したこの詩人は、1893年に「南アメリカのパリ」と呼ばれたアルゼンチンの首都を訪れており、時にマドリードと往復しながらそこでおよそ6年ほどの期間を過ごした。そして、ダリーオはすでに1892年からブエノスアイレスの「ラ・ナシオン」

25) 'A Atlántida' en Vasseur, Álvaro Armando, *Cantos del nuevo mundo*. (1907) Montevideo, Antonio Diaz, pp.19-29.

26) "Los rutilantes cantos augurales/ Del portentoso porvenir". *ibid.* p.19.

27) "las grandes rutas industriales" en 'Oda á una trágica', *ibid.* p.127-133.

紙に寄稿しており、それは同地を離れてからも1916年まで続いた。それらの記事はヨーロッパの芸術の動向をアメリカ大陸にいち早く伝えるものであった。

#### 4 最後に——ダリーオの未来派批判と『徒然に……』の「未来主義」

ダリーオは、1909年4月5日の「ラ・ナシオン」紙に「マリネッティと未来派」Marinetti y el futurismo と題した記事を書いている。マリネッティのフィガロ紙への「未来派宣言」の寄稿が同じ年の2月20日のことであるから、大西洋を越えての最新の文芸思潮の紹介としては非常に早い反応であったと言える。そのなかでダリーオは「偉大なマリョルカ人、アロマルによってすでに築かれていた未来主義」という表現を用いており、そして同時に、この名称の誕生については彼自身が『放浪の歌』*Canto errante* (1907) の「解説」*Dilucidaciones* で先に取り上げている<sup>28)</sup> ことも指摘している。そして、こうした前置きに続いてマリネッティの11箇条のスペイン語訳が載る。

ウイドブロが『徒然に……』で引いたものはこのダリーオの引用に似ているが、いくつかの場所で異なる言い回しが用いられている。ウイドブロとダリーオの未来派宣言の紹介が異なっているもう一つの点は、前者はまずは宣言を引き写し、それを終えてから舌鋒をイタリアの詩人に向けているのだが、後者は宣言の一箇条ごとに穏やかに、しかし辛辣にマリネッティの提言を批判する。危険への愛を、活力と無鉄砲の性向を大事にするというなら、ホメーロスの作品にすべてがあるのではないか。シチリアで生じた惨事における破壊に比べれば、自動車など夢のなかの取るに足らないコガネムシではないか、と。

ウイドブロはそのようにしてダリーオが連ねる批判のうちから「裸の女性と嵐とでは、いったいどちらが美しいだろうか。一輪のユリと号砲一発では、はたしてどうか」<sup>29)</sup> という言葉を借り、「それにもかかわらずマリネッティ氏は、女性の異教的な裸体よりも自動車がお気に召すようだ。これでは幼い子供と変わらない。何はさて置き、まずは汽車ぼっぼだ。バブー・マリネッティ」<sup>30)</sup> と自らも攻撃的態度を示す。そのようにして、ウイドブロはダリーオの未来派への批判的な態度を引き継いでいる。それは不思議でもない。というのも、若いウイドブロはダリーオに強く傾倒——3号までを出した詩誌「青」の標題は、ダリーオの詩集『青……』*Azul...* (1888)

28) *Diario*, Rubén, *Canto errante*, (la primera edición 1907: 2000) Madrid, Espasa Calpe, p.14.

29) “¿Qué es más bello, una mujer desnuda o la tempestad? ¿Un lirio o un cañotazo? en ” Huidobro, Vicente (1914), p.167.

30) “Sin embargo, el señor Marinetti prefiere un automóvil a la pagana desnudez de una mujer. Es esta una cualidad de niño chico: el transito ante todo. Agú Marinetti.” (ibid.)

から取ったものであり、ニカラグアの詩人がチリを訪れた際には「若いミューズ」に特集を組み、自ら表敬記事をもものした——していたし、あるいはその「ラ・ナシオン」の記事を通じて未来派宣言とアロマルを知るに至ったのではないかとすら思われるからである。

しかし一方で、ウイドブロはマリネッティに対して、未来派に対して、公正な態度を示そうともする。マリネッティの戯曲『たらふく王』*Le Roi Bombance* (1905) や小説『マファルカ』*Mafarca Il Futurista* (1910) を保留条件も一切付けずに称え、未来派の信奉者のひとりとしてカヴァッキオーリを紹介し、その『紺青のカエル』*Le Ranocchie Turchine* (1909) から自らが美しいと考える詩句を引いてこの論稿を締めくくってさえている。

批判を加えるだけでなく、最後になってマリネッティらによる成果も示そうとするウイドブロが、『徒然に……』で未来派を取り上げた目的は本当に、それを貶めることであったかのだろうか。それともヨーロッパで話題になった新しい美学をチリの読者たちにできる限り客観的に紹介することであったのだろうか。むしろ、ウイドブロがあからさまに攻撃の意図をさらけ出すことはなく、後者のように装っている。1925年にパリにてフランス語で発表したクレアシオニズムの宣言集『マニフェスト』にも、「未来派と機械」*Futurisme et machinisme* と題された未来派を巡る一章が収まっているのだが、やはりそれも批判的なものだ。『徒然に……』の刊行から十年ほどの歳月が流れて、未来派を取り巻く状況も変わってきているにもかかわらず、ウイドブロの同派に向ける厳しい眼差しには基本的に変化がない。さらにこの時には、未来派が詩に寄与するところはなかったとさえ難じている。もはや引用される詩行は、未来派の古臭さを示すためのものである。

『マニフェスト』には、当時の文学思潮を席卷しつつあったシュルレアリスムに対するウイドブロの激しい対抗心が覗いている。クレアシオニズムは、まだ祖国チリにあった十代の頃から十年近い歳月をかけて、ヨーロッパの他の文学の流派から遠いところで構築した詩学であるのだから、旧大陸に渡って異郷の詩人という立場に身を置いたウイドブロにとって、そのような気概も自然なものであったと言えよう。そしてシュルレアリスムへの強い対抗意識のせいで若干見えにくくなっているが、未来派もまたウイドブロが競う気持ちを抱かずにいられなかった相手であるはずだ。そして『徒然に……』の発表された1914年にはシュルレアリスムがまだ誕生しておらず、たとえ、自分がまだサンティアゴの文学界から一歩も踏み出していなかったとしても<sup>31)</sup>、新しい文学の旗手を気取る未来派への競合心はなおさら強烈であったに違いない。

31) ウイドブロは『向かい風』所収の「告白しがたい告白」*La confesión inconfesable* で、17歳の時にすでに詩におけるアメリカの第一人者にならねばならないと考えたこと、さらにその野心はスペイン語圏に広がり、ついには世紀を代表する詩人にならなくてはならないと思いついたことを明かしている。(Huidobro,

先に触れた論稿でジャネは、ヨーロッパにおける最初の前衛主義のものと呼べるマリネットの宣言の意義を貶めるのに、ウイドブロがアロマルとバセウルを利用したのではないかという疑念を提起している。さらにそれは、今度はバセウルを引き合いに出すことで、直前に手放して称賛したアロマルの価値を相対的に下げるといふ二重構造を持つ可能性さえを指摘している<sup>32)</sup>。

しかし、ウイドブロが『徒然に……』でバセウルの前兆主義に見出した意義は、それがアロマルの未来主義に対抗するために利用できるというだけのことだろうか。ジャネはアロマルについて同様のことを考え、1916年のウイドブロの詩集『アダム』の表現とアロマルのエッセイに現れるアダムの象徴とを対照した上で、マリョルカのカタルーニャ主義者が主張した未来主義がチリのサンティアゴにいたウイドブロのもとにまで届き、クレアシオニスムの形成の過程で何らかの影響を及ぼしたことを例証しようとしている。

その時ジャネは触れていないが、バセウルとその前兆主義についても、ウイドブロが未来派の、あるいはアロマルの価値を下げるためだけにそれを引き合いに出したのだとは思われない。バセウルの提起する新しい理想的な社会や未来の人間のあり方も、ウイドブロのこの旧約聖書に登場する最初の人間に名前を授かった詩集と深いつながりを持つのではないか。つまり、ウイドブロのアダムは、聖書のそれではなく、知性の目覚めを体験した科学の人間であった。そこに、旧来の価値観を乗り越えた新しい時代の意識を抱く人間が生み出されたのである。『アダム』の持つ意義は重要である。ウイドブロはこの作品を経て初めて、神に代わって詩人が詩のなかにしか存在し得ない世界を創造するというクレアシオニスムの宣言——詩集『水鏡』*Espejo de agua* (1916) に載る、「詩学」*Arte poética*——にたどり着き得た。クレアシオニスムの宣言『マニフェスト』の冒頭に置かれた「マニフェスト・マニフェスト」では、詩が科学のなかの科学であるという旨を語り<sup>33)</sup>、『アダム』の精神をなおも引き継いでいる。バセウルはエマソン、そしてエマソンを敬愛したホイットマンに、モデルニスモの詩人たちに見つかる以上のものを見出した。ウイドブロはエマソンとアロマル、そしてバセウルに少なからずを負っている<sup>34)</sup>。

ウイドブロがやがてクレアシオニスムと呼ばれることになる自らの美学に「未来主義」とい

---

Vicente, *Vientos contrarios* en Huidobro, V., Arenas, Braurio (prólogo) *Obras completas*. (1964) Santiago de Chile, Zig-Zag, pp.705-706)

32) Gené, Emilio (1976) pp.295-296.

33) 'Manífeste manífestes' en *Manífestes*. (2003) París, Indigo (primera edición: 1925, París), p.24.

34) 『アダム』の序文にその言葉を直接引いているように(『マニフェスト』所収の論考「クレアシオニスム」でもそれを自己引用している)、エマソンもウイドブロの詩学の重要な源泉の一つだが、ここではそれに触れない。

う名称を与えたいと思ったかもしれない、と考えるのはあまりにもうがった見方であろうが、しかし、その出発の時点でアロマルの未来主義、そしてバセウルの前兆主義に強い共感を覚え、それらに共通の基盤となるものを見出したのは確かだろう。未来派を名乗るイタリアの前衛主義に対しても、自らが向かおうとしている方向と重なるものを感じながらも、いやむしろそれ故に、その基本姿勢——ダリーオも指摘しているところだが——、マリネッティの最初の宣言にうかがえる、個々の人間を尊重ようとしな、全体主義的な傾向を否定することは必要な行為であったのではないか。

スサーナ・ベンコが『ビセンテ・ウイドブロとキュビズム』のなかの、詩人の作品と未来派の関係について論じた章で指摘しているが<sup>35)</sup>、ウイドブロとその詩には矛盾が満ちている。そのような観点からも、ウイドブロのマリネッティの未来派に対する批判には、単なる先行する前衛主義への敵愾心、アメリカ大陸出身の詩人のヨーロッパの文学の最新潮流への挑戦といった見方を超える本質的な問題が背後にあったと思われる。人間のそれである。

それが『徒然に……』という最初期の論集に現れたのであり、人間的なものに対する関心が生涯を通じて詩人としての資質となったのだと考えると、この「未来主義」の章はいつそう興味深いものとして読める。たとえば、ウイドブロは、アロマルが未来主義を個人化の過程に帰することで流派を否定したとその姿勢を支持する。しかし、マリネッティはそれを流派と見なすことで自我を軽視したと非難している<sup>36)</sup>。これはウイドブロが詩作において何を重く見たかを明らかにしている。またバセウルが前兆主義の詩に出来事の積層である過去ではなく、創造されつつあるもの、生成の過程を求めたが、それはマリネッティとアロマルが未来派／未来主義が主張するところと同じなのだ<sup>37)</sup>と述べている。クレアシオニズムにもまたそのような側面はなかったか。

こうしたことどもについて、また新たな機会を持って論じたい。

---

35) Benco, Susana, *Vicente Huidobro y el cubismo*. (1993) México, Fondo de Cultura Económica (la primera edición: 1991, Caracas, Monte Ávila Editores Latinamericana), p.121.

36) Huidobro, V. (1914) pp.168-169.

37) *ibid.* p.170.